

現代の宗学的課題

沖本克己

沖本でございます。たいへん名譽ある場所にお招きをいただきまして、お話させていただくことを光榮に存じます。

にもかかりませず遅刻を致しまして、たいへん申し訳ございません。暫く東京にも縁がなく、その間にどんだんこちらの様子も変わりまして、何年か前に峰岸先生と仕事の後に飲みました時、上手い帰り道があるから教えてやるといふので東京駅へ実にスムーズに帰れた記憶があります。今日はその逆を行ってやれと思つたんですが、どこから何に乗ればいいかまるつきりわからず、あれこれ迷つてしまい、結局早道を取ろうとろうとして、逆に時間がかかつてしまつたといふお粗末なことで、たいへん申し訳ありません。

ともかく、いま池田部長からご紹介を受けまして、立派な経歴の偉い先生とは誰のことかいなと、最近はとんと勉強もしておりませんのでお恥すかしい限りです。そしてそれにも拘わらず「現代の宗学的課題」なんぞという大それた題をつけてしまひまして、たいへん困つております。結局、現代の宗学ということになりますと、私にとりましては臨済宗の直

面しております深刻な危機、これは日頃、関係者に実感されなだけでいっそう深刻かもしれない、そういう問題なのでありますが、それについて少しお話しし、従来からこういう課題にまた違つた立場から関心を寄せておられます皆様のお知恵を拝借できればと、虫のいいことを考えたりした次第です。まあ、今日の失敗例をとりましても行く道と帰る道はまた話が違いますし、何がどうなるかはわかりませんが、どうか寛容のほどをお願い致します。

さて、われわれは普段のんきに研究室の中に居るわけですが、一歩外へ出ますと様々な問題がこの世の中には渦巻いておるようなわけです。

そんな中で、我々自身、研究者として、また、一介の市民として生きていく時、何が問題であるのか。とりわけ宗教というものに関わっている者は、何らかの社会的な発言、それがあつたていようがいまいが、でありますけれども、そういう問題にも自らのこととして関わっていかなければならぬのではないか。そういう思いが致しまして、これは仏教学を

はじめた頃から、ずっとそついつぶうに考えていたことでもあります。こんな時代に浮世離れをした学問をやるといふことは、いったいどういふことだと、ちょうど私たちが学生の頃は、この駒澤大学も、それから東京大学も、たいへんな騒動がありまして、それぞれに学生達は悩んだわけでありま

す。結局、学問は無用のものであると、しかし、世の中にはすべてが有効性という尺度、効率や即効性などで計るだけでなく、そういう無用のものも存在を認められるという社会的システムの余裕が必要ではないか。そして、そういうものがあるのかどうか社会に何らかのサジェッションをすることもあつたのではないか、ということ、とりあえず無用の人間として書齋にこもる方向を選んでいたわけでありま

す。ところで、私の勤めております花園大学と申しますのも宗門校でありまして、駒澤と同じく禅を標榜しております。しかし臨済宗と曹洞宗といいますと、これはもうとても相容れぬライバルというような考え方が一部にはあります。ある意味ではそうす。だいたい似たもの同士がよく喧嘩をするわけ、あまり似ていないものは喧嘩にもならないわけでありまして、このごろはなんだかアメリカとアフガンが喧嘩をしておりますが、あれもやはりとても文化が違うということを標榜してはおりますが、実は本質的にはそれほどどちがいはな

い。イスラム教とキリスト教は歴史的にはいろいろあります。元々は同じ神のお告げに従うものでありますし、それぞれに家族を愛し平穩に暮らすことを望んでいるだけでありまして、すから表向きは別にして、本質的にはちがいはない。そういうもの同士、あるいは深い関係をもつものがかえつて喧嘩をするわけですが、といって花大と駒大が喧嘩をしているわけではありませぬ。むしろ仲がいいということ、説明しようとしてゐるわけですが、臨済宗の中でも、セクトがいつばい分かれておりまして、これは中国からもたらされた仏教が禅なのですが、その禅というのは、みんな自分が親分でありまして、わしが一番偉い。他の奴は全部駄目だ。こういふところがありまして、まあ、曹洞宗は道元さんひとりか偉いといつていれればいいわけ、その点がかえつて案なのでしょうが、臨済宗はあちらを立てればこちらが立たない。我々はその間をさまよつておるわけでありま

す。そういうわけで決して大団圓結できない體質を持っております。それは今も続いておりまして、ある老師のところへ遊びに行きますと、他の老師の批判に付き合はされる。こちらの老師のところへ行きますと、また違つた話をしなければならぬ。俺はいつたい何なんだと思ひながら辛い思いをしているわけですが、それぐらい今でも中身はばらばらです。

そついつ臨済宗の中で、我々の属しております妙心寺派と

申しますのは「林下」と申しまして、「林の下」と書きます。これは臨済宗が主に京都の五山、それから後に鎌倉の五山、そういうものを中心に貴族あるいは武士と繋がって展開していったのに対して、そういうところへ入れてもらえない。つまり美味しい場所にいけなかった人々、こういう人も臨済宗にはおりまして、そういう人は五山の下という卑しめられた位置におかれまして。そこで、地方教化、つまり街が駄目だから田舎へ行こうということとで地方に向かったわけです。それを宗門では「林下」といっておりますが、禅宗、日本の禅宗史、あるいは仏教史の考え方では、曹洞宗も林下に入るわけでありまして、「五山」、「林下」という範疇で分けますと妙心寺派と曹洞宗は同じグループに入るわけでありまして、あ、なんだ仲間か、というような一面もあるわけであります。

その後、鎌田先生、それから、もう押しも押されぬ鎌田先生、二ついう方々がそれぞれに御研究を公にされて、我々と致しまして鎌田先生は方に両方併せ持つようなスタンスをお持ちですし、学問それ自体が広い。鎌田先生は宗門のことをきちんとなさいますが、そこには一貫した客観性がありますから、我々もそれについてとやかく言うことはなく、ひたすらその学恩を受けるといふ、そういう立場があります。

更に、椎名先生、田中先生その他その他、素晴らしい方が続出してあります。それに対して、臨済宗の花園大学仏教学科禅学専攻というのは、バラバラとしか人間のいない場所でありまして、学問的には専ら駒澤大学のお世話を受けている関係にあります。昔は、古田紹欽先生とか柳田聖山先生とかいうようなお一人で何とかなるような方がおられたのですが、最近はずっかり駄目なわけです。とにかく、きちんと喋ってはおりませんけれども、長い時間の中で様々に交流を続けさせていただいていたというわけであります。

それで、今はもうあまり勉強もしておりませんが、宗門の方にも色々関わることがあります。そして、最近我々の宗務総長が日本の仏教は危機的状況にあるのではないかと。統計によれば、20数パーセントしか仏教信者がいないという数字が出ていますが、どうなんだと、そしてこういう状況の中で何もしていないというものは、それは悪いことをしているに他ならんということ、大学としても、それも宗門の大学として責任を果たさなければならぬ。そういうことで社会的な問題に直接関わっていかうではないかということ、幾つかのグループができました。

そのうちの一つが、カルト研究です。オウム真理教以来のカルトの問題、これをどう考えるか。実は臨済宗の一部にはある種の危機意識がありまして、例えばオウムがつぶれると

する。するとよりどころの無くなった信者はどこへ行くのか。そうするとどこも逃げ込み場所として、よく似た場所というのは臨済宗ではないかという、かなり深刻な話もありまして、まあ来る人は拒む必要はありませんが、そういう人が入ってきたとしても、それに引つ掻き回されずに宗旨を守っていく自信があるか、と聞けば、どうやら怪しいことになってくる。ということ、オウムを、実はもつと具体的にあまりに生々しいので、ちょっと申し上げにくいのですが、新宗教、新新宗教を考えるということ、我々が心配しているというか、やはり問題におかなければならないのは、創価学会であろうというふうに思っているわけでありませぬ。

なぜかと申しますとオウムはたいへんちゃんなものではありません。たいへんな事件を起こしましたが、あの事件そのものの動機性も、それほど明確な宗教的な位置づけがなされていない。むしろ、あの地下鉄サリン事件というものは宗旨のしからしむる行為であったのかどうか。むしろ単に警察を混乱させるためだけだったのではないかと思うのですが、起こしてから跡付けのように宗教的屁理屈をくつつけていった、というふうには我々は理解しているわけでありまして、だから、あれはたいへんな事件でありつつ、たいへんな問題とは考えたくないという思いがあるのでありますけれども、そういう突出したカルトというものが、だんだん沈静化しますと体制

内に入つてまいります。それは気付かぬうちに入つてまいります。そうして、その真の宗旨は逆に隠してまいります。そして平和な顔をして社会に浸透していつて、そのまま体制内化してしまえばいいのはありますけれども、あるとき決起するということがありうるということを我々は考えているわけです。少なくとも学会が「王仏冥合」という祭政一致を目指すスローガンを降ろしたという話は聞いておりませぬ。そうである以上、ことは簡単ではないはずで、現に日本社会の指導的な地位に創価学会は入り込んでおります。政党も堂々と持つております。裁判の変な判決もどんどん出ております。行政もおかしいところがいっぱいあります。マスコミもはやきちんとしたことを我々に伝えませぬ。

そういうふうに見えないところで、様々な地殻変動が起きているのではないか。そういうことを本当に真剣に考えなければいけない、というふうにおもっているわけでありませぬ。それで、そういうことを勉強したり、この臨済宗から発生した新興宗教というのも幾つかありまして、そういうのを調べている矢先、またテロが起こったわけです。それで、まあアファガンが戦場になつていっているわけですが、新聞なんかはいつもおかしなことを申します。イスラムに「原理主義」という、定義のはっきりしない、イメージばかり先行した言葉をくつつけたり、口を合わせてテロ批判を行なつたり、というのがそ

の一端です。

確かにテロはいかにも忌むべき行為でありまして、これは我々が糾弾したって仕方ないんですが、しかし、本当に忌むべきものはテロだけなのかということが私は気になって仕方がない。

というのは、我々は、といいますか、私なんぞはテロという話を聞きますと、すぐに司馬遷の『史記』の中に「刺客列伝」というものがありまして、中国の歴史の中で、大國に蹂躪された小國がテロリストを放つという話がたくさんでてまいります。それを読んでもりまして、結局、大國に圧迫された小國が進退窮まって起死回生の策に出て行く、これが刺客の役割でありました。そういう話を見るにつけ、テロあるいは刺客というものも政治の一つの現象に過ぎないのではないかと。我々は政治とは平和を守るものだと思っておりますけれども、その政治とは平和を守るという大義のために戦争もする。侵略もする。そして更に、政争という政治的争いの究極のところでは戦争という行為が国には許されている。

むかしヴェーヴァーが申しておりますけれども、**「国家」というのは暴力装置をもつことを許された組織である。**と。つまり、国とは法律や警察、軍隊などをもって我々を押さえ込む強制的な力を持ち、我々を殺す権利をさえ持った、そういうものであるということでありまして。戦争は我々はいかに

も嫌います。戦争はいいことではありません。しかしながら、じゃあ戦争はいけませんと言っていれば戦争はなくなるかといえば、国がある限り戦争はなくなりません。

では国をなくせばいいではないかというのは、いま世界にはびこっておりますグローバリズムという掛け声でありまして。このグローバリズムというのは、みんなインターネットに惑わされて、ヨイショ、ヨイショと担ぎまわっておりますが、私はこんなものは上手くいくわけがない。これはアメリカのご都合主義にすぎない。世界が一つの価値にまとまるといふようなことは幻想に過ぎないし、その一つの価値というのは必ずアメリカの価値でなければならぬということは見えてくるわけです。そんなものに乗るわけには行かない。というわけで、こういう価値の一元化であるとか、空虚なユートピア理論はとも我々の受け入れるものではありません。

日本は戦後五十年、アメリカの言いなりになり、アメリカナイズされて日本の大事な文化を失ってしまいました。にもかかわらず、五十年経つてもなおアメリカ化、アメリカナイズは完成しない。いびつさも増しておりますが、むしろ反作用がいま起こりつつある。そういう気がして寧ろ楽しみにしているわけでありまして。

そして、今回のアフガンのテロ、これは文明に対する挑戦という言葉もしきりに出てまいります。こういう言い方を

するとイスラムは文明外なのかという素朴な質問が出てくるわけです。ですから、我々は新聞がいうことを、まともに受け取るのはどうも一歩下がってから考えなければいけない。異文化の衝突ならまだしもわかります。しかしそれ以前にアメリカがそういうテロがいけないという資格を持った国なのか、ということも十分に検証しなければいかならうということ。大体があつたリバーンという組織もアメリカの援助で出来たものであり、当時、彼らはアメリカでは「自由の戦士」とよばれ、ソ連に対するゲリラやテロが賞賛されていたのを忘れてはなりません。その彼らを紛争のあと弊履のごとくうち捨てたのが今回のテロの原因の一つです。

ともかく一介の野次馬に過ぎない我々でも、そういう問題を真剣に考えないといけない。それが近代の大衆社会というものでありましょう。為政者にすべてを任してはられない時代が今なのです。そして、大衆の隅々に至るまでが、世界の情勢を知り、それに対する自分の見解を持つということ、実はこれは日本だけの現象なんです、アメリカ人なんかはまだ日本がどこにあるか知らない人が大多数です。ヨーロッパはもっとひどい。アフリカも同じ。というわけで、これだけ情報が行き渡っている国はそうないのではありませんけれども、この方向こそは、これからどんどん進んでいくでしょう。それによっていろんな地殻変動が起こっていくのであるうかが

思いますが、とにかく今はまだ国と国が争っているという、そういう時代ですね。

それにしてもアメリカのやっていることは本当にひどいことだということをよく考えなければいけません。彼らは大量殺戮を、無辜の民を殺したのはけしからんといいますが、日本人はアメリカ人に「無辜の民」を数え切れないくらい殺されておりますが、彼らは謝罪はしておりません。パレスチナでもイスラエルを後押ししてやっておりますが謝罪はしません。ベトナムでもやりました。こういう国の人間が自分たちがやられた時にだけ、そういうことを言う、そして、それに乗ってテロはけしからんというのは、これはやはりおかしい論理だと我々は思うわけでありませぬ。

こんなことを言っていると、なんだが右翼のアジじゃないかと思われるんですが、ついでに申しますと、先に日本は戦争をいたしまして、戦争犯罪の問題が毎年夏になればでくるわけです。そして宗門や教団の戦争への加担ということが問われている。そういう本が最近二冊でてまいりました。結局、時代情勢が動きまると、教団、あるいはそこに属す僧侶、あるいは学生、あるいは市民というものは国の方針が大きくそういう戦争というところへ向かった時、果たして何ができるであろうかということは真剣に今だからこそ考えておかなければならないのではないか。そういうときに、ちよつと駒

澤大学で勉強なさったヴィクトリアさん、その方がこの仏教者の戦争責任とか何とかという本をお書きになったんですが、それをお書きになった場所が花園大学だという、たいへんな因縁の持ち主なんです、そついつ本が上梓されており、これに關しましては本学の石井公成先生が、たいへん綿密にチェックを入れておりますので、まあ、それに譲りまして、もう一冊、臨濟宗の方からも、実は臨濟宗妙心寺派というのは戦争中、ちやうど日峰禪師という方の遺念をいたしまして、その記念にというので、昭和二十年ですかね、戦鬪機・妙心寺号というのを、国に献納したわけです。それで、それについて厳しい批判を著者も宗門の方でありますがしているわけです。

そついつのを見るにつけ、我々はもし自分がまさに国が戦争をしているときに居合わせたとしたら、これは好き嫌いの問題ではなく、居合わせてしまうわけです。まさに不幸にも居合わせてしまつ。アフガンの子供達も別に戦争が好きなのわけではないのですが、もう数十年ずっと戦争の中に置かれているように、我々もまたそついつ状況に何時おかれるかわからない。であればこそ、宗教者として、また、仏教を信じる人間として、どういふ態度が取れるのかは考えておかなければならないのではないかといふふうに思つたわけです。

それで、その時、いま挙げました二冊の本、これは当然批

判的なものであります。つまり、仏教徒たる者、釈尊の教えに背いてはならん。これは当たり前であります。じゃあ、我々の日本の仏教というのは、どういふものなのだというところが問題になるのであります、これははっきり申しまして、異論も色々ございましょうが、今の日本の仏教はもはや釈尊の教えではありません。それはひとつの看板にすぎない。長い歴史の中で、大きく変わってきたわけであり、その変わった姿である日本の仏教を我々は受け止めてい

ます。ですから、この日本の仏教の姿を釈尊の原理によつて批判するといふのは、些か問題があるわけです。つまり時代と共に思想文化は変化していきます。変化していくのを是とするか非とするかは兎も角として、その変化は勿論、原点から始まつていくわけですから、その起点のところから見ていくのが正しい。

しかし、変わったものがあつて、それがその起点とどこかで通底しているはずだといふ信仰が、仏教を仏教たらしめているわけです。ですから、何もかもが仏陀の時代のままで通るわけがないのであります、時代の変化によつて当然変わらなければならないものがある。変えなければならぬものがある。そして、変えてはならないものがある。そついつものをきちんと区別しないと、いつまでたつても時代から大きくずれた価値基準でものを言つたり、逆に時代に迎合しすぎ

たりする。そういう問題が起こってくるわけです。

ですから、我々は「仏教」と一言でいう時、どの仏教なのかということをごきちんと押さえないければならないというわけでありまして、仏教徒が例えば戦争に加担してはいけないというのであれば、それは釈尊の仏教であります。そして釈尊の仏教は別のところで、社会的な世俗的な下らぬ悩みに対応してはならぬということをおります。つまり、民衆が、つまり一般の庶民が日常生活の中で苦しんでいるのは真の苦しみではなく、妄想のなせる術にすぎぬのであるから、その表面的な苦しみ、それは本人にとつては深刻なものです、それを助けようとしてはいけないと仏陀はいつているわけです。そしたら、仏陀の教えに従つて戦争を糾弾するのであれば、社会的発言やボランティア活動などはすぐに止めなさいといわなければいけません。人道主義も論外です。これが価値の一次的理解でありまして、ここはこれを使うけど、ここはこれを使わないというふうなことで話にならないわけです。

ですから、現実に釈尊の教え全部を今、この時代の中で引き受けることはできません。そしたら仏教が様々な屈折点を持つて現代に来て、そして、社会に広く受け入れられている理由をごきちんと考えなければならぬわけです。釈尊の仏教が一番大きく変わりましたのは、インドの大乗仏教の運動で

す。それまでの仏教を小乗仏教と貶してありますが、大乗仏教は果たして仏教かという問題を本当に真剣に考えますと、これは釈尊の仏教と全然似ても似つかぬものであります。これを同じ仏教であると語るのは、ほとんど詐欺ではないかと思つてくらゐ違つたわけです。

しかし、その大きく展開した大乗仏教の更にそれを受け継いで中国仏教が始まっている。そして、中国で最も大きく変化したのは国家との関係であります。つまり、歴史が大きく変わつていきまして、特に中国は中央集権国家が早く完成しておりまして、中央集権国家というのは、国民を全部支配下において、主な義務は兵役と税金ですね。兵士になり、税金を納める。これが国民の義務であります。

そのなかで、僧侶だけは兵役と納税の義務を免除されたわけです。しかし、国家たるものは、そういう免除をするときに必ず別のカードを切ってくるわけです。それはどういうことかという、僧侶の国家認定です。僧侶というのが国家資格になつたわけです。ですから、私のような益暗は当時生まれてますと、とても僧侶になれないような非常に難しい試験、私がつてているのは幾つか問題があるんですが、出題例が、その一つには、『法華経』全部覚えてくるやつです。八巻あるんですねあれは。それをともかく全部覚えるんです。池田先生なら覚えていらつしやるかもしれないのですが、

我々には無理です。そつなるとここで国家試験に合格するのは池田先生だけで、あとはみな駄目。偽の乞食坊主にならならせてもらえらるというようなことで、たいへん難しい試験をすることによつて、秀才を選び出して国家管理の中に入れてしまつわけですね。

つまり、納税と兵役というたいへんな任務を免除された人間は、高級官僚と同じくらい手厚い待遇を受け、そして、受けたつ国家に奉仕するという役割を担つたわけでありませう。彼らは国家に奉仕するわけです。国家への奉仕とはどういふことかと申しますと、国政に参画する。つまり、政治の黒幕になり、同時に、皇帝であるとか、上流階級の人々の宗教的な安心、精神的バックボーンですね。この二つを受け持つわけです。庶民は相手にしない。そういう僧侶が中国で展開していくわけですね。

しかし、あの中国という広い国はいつ行つても面白いといふか、気持ち悪いといふか、大変なところなんです、あそこはいま共産主義ですから、共産主義というのはありとあらゆる人が富を分け合つていふと思ひ込んでいたら、なんと乞食がいるんですね。何で乞食がいるのつて聞いたら、中国には大昔からいて、伝統的職業だといわれて、そりゃわかるけれど、共産主義だつたら乞食は存在し得ないではないかと言つただけれども、どうもこつちが聞いていることがわか

つてもえなかつた経験があります。

そして、そういうふうにあの国も常にダブル、トリブルのスタンダードを持っておりまして、為政者とその階級のところでは、非常に上手く動いておりますが、そこから一步離れたところでは、全然別のことが起こつていたわけですね。これは社会的な二重構造といふことであらうかと思つたのですが、そういうなかで、仏教はしつかり国家管理の中に入り立派なお寺もどんどん建ててもらえらる。じゃ、庶民はどうするのかといふと、だんだん庶民も頭がよくなつてくる。これは先ほども申しましたが、我々が勉強して頭がよくなるといふことは、実は大変なことでありまして、国民くまなく字が読めるようになつていふのは考えてみればたいへんな出来事であり、近代の奇跡であらうかと思つたわけですね。昔は大部分の人は字なんか読みませぬ。いりませぬ。だから勉強もしませぬ。そして、朝起きたら働き、日が暮れたら寝ます。それだけです。それ以外に何にも必要ないわけですね。必要がなければ人はそれ以上のものは求めませぬ。それ以上のことを求めると却つてやばいことになる。そういうわけですから、一番下の階級ですね我々の先祖は。そういう教育の機会の何もない時代、寿命は大概三十代から長く生きて四十代まで生きれば長寿、そういう短い途方もない人生を先祖達は繰り返し繰り返し送つて、いまの我々に繋いでくれているわけですね。

ですから、そういう人たちには文字も要らない。文化もいらない。そういう時代がずっと続いて、例えば、日本の平安時代というのは、たいへん文化が爛熟した時代だと言われておりますが、私の先祖なぞは間違ひなく縄文式や弥生式と同じような掘つ立て小屋で暮らしていた。竪穴式住居です。平安京の周りには竪穴式住居、弥生時代と変わらんものがゴロゴロあった。たぶんこの辺はそんなものさえない荒地であつたに違ひない。いまは一等地なんて言つてますけれども、その頃は三文の値打ちもないところに過ぎなかつたのですね。

そういうところで、ほんとうに土くれのように生きて死んでいった先祖たちのおかげで、我々があるわけでありまして、こういう私の話が高級かどうか知りませんが、高尚な場所へこられる方がおられることは大変なことだと思つたわけでありませう。そして、そういう貧しい時代が長く続きますけれども、その頃は死ぬということをあまり真剣に考へてなかつたにちがひありません。みんなバタバタ死にますから、死は恐ろしいし死ぬのは嫌だと思つても死について、あるいは来世について考へているゆとりさえ恐ろしくなかつたと思います。それがだんだん、そういう問題が出てくる。そして、墓や葬式が始まる。

ということ、中国でも高級な僧侶になれなかつた人たちは、勝手に頭を剃りまして、ボロ衣を着まして、一説には、

そういうボロを着て訳のわからんことを言つた人をボロ（梵論）と言つたのでそれを着ている人をボロと言つたという、いづれが起りかわからないような説もあるのでありますけれども、そういうボロを着た乞食僧というのが、また、これは念仏僧ともいふのですが、簡単な念仏を唱えて庶民を仏教に教化し葬儀を執行していた。そういう時代がずっとあつたわけ

です。その中国の、まあ、非常に荒つぱいことを言つておりますが、その中国の仏教を、ほぼそのまま継承したのが日本の仏教であります。日本独特の仏教は真宗であります。浄土真宗であります。まあ、日蓮宗もそれに入れていいと思ひます。その念仏系の宗教ですね。これが日本独特のもので、制度としては中国のものとも何かわちがひありません。つまり、国家の枠組みが中国とほぼ同じものでありますから、その中にある宗教もまた国家管理の中にあつたわけ

です。昔の僧侶というのは、やはり、僧侶になることのできる人というのは、上流階級だけだつたわけ。そういうふうな、大きく変わった仏教、その仏教をどういふふうにか考へるかということ、今の日本の仏教をどう考へるかということ、これを全面的に間違ひだと言つたのか。それとも、これでいいのだと言ふかによつて批判の視点といふのは違つてくるわけですから、まず、それをきちんとしておかなければ

ば、いかんではないかと思っわけです。

それで、まあテロの話からとんだところに話が飛んできまして、本日はカルトの話をもう少ししてみたいと思って参つたようなことであります。先にも申しましたが伝統教団とカルトという問題で花園大学では現代宗学研究室というのを作りまして、カルトを研究しているわけですが、これはどういうことかと申しますと、昔、『中外日報』で「いま宗教に何が問われているか」、こつこつ特集がありまして、去年のことですが、まるで伝統教団の存在理由がわからん、宗教本来のあり方から大いに外れているではないか。そして、やつていふことといえ、世俗的な儀礼を集団でやつていふだけだ。現実をどう受け止めて、どう生きるか。そつこつ問題に真剣に対応していかないか。とつこつ問題意識です。これに対して座談会を行ないまして、宗教学者であるとか、教団の方々が集まつて話をしたわけ。そつこつすると、まあ若い人たち宗教学者たちは非常に真剣で、そして、厳しいですから教団は批判的になつてしまつたわけ。そつこつ、つまり、いま申しましたように、既成教団は儀礼や教義、そつこつものに依存している。儀礼というのは具体的には葬式に依存してあり、つまり葬式仏教ではないかといふことになる。私は逆に葬式仏教のどこが悪いのかといふ思いを強く持つていふのですが、まあ、それは別に致しまして、もう一

つ大事なものは、それをやつてくれる僧侶が規範を喪失し、僧侶が自己規制をしていない。つまり、日本の仏教は戒を守らぬといふことが批判される。僧侶は実は、といふか一応は大乗戒を守つていふのですが、大乗戒は非常に特殊な戒でありまして、外的規制に縛られる必要はないといふことですから、まあ、何もやつていいといふことになりません。表面的な現象にもとらわれない。そつこつものですから、えてして自らを厳しく律するところが欠けてしまふ。まあいつてみればだらしなく大衆化してしまつていふことですね。そつこつことが指摘される。そして、そのうえ宗門自体の近代化が遅れ、そして、現代社会への対応能力を持たない。時代の動きを軽視している。こつこつ批判があります。そして、いまこの国の人たち世界の人たちが真剣に精神的な問題の解決やそのための示唆を求められているのにも気が付いていない。そして、本来なすべきことが蔑ろにされていふのではないか、こつこつ批判があるわけ。一々もつともな事でありました。それがカルト発生の原因であると言われてみれば、そのとおりです。

それに対する伝統仏教側の対応といふのは、特にここに出ていたのは臨済宗のかなり重役の方であります。時流に乗つて時代に迎合することは、かえつて危険であるといふ立場をとりまして、伝統に戻ることに、そして、そのもつ力をし

つまりと再認識すること、これが大事である。そして、若い僧侶がどうも規範性を持っていないのは大いに問題であり、若い僧侶を育成することが必要で、社会性を持たせなければいけない。けれども、いま起こっている現象をそのまま捉えるだけではなくて、社会全体の問題として捉えなければ仏教の役割、あるいは、そこにおける位置関係といえますか、そういったものも見えてこない、というようなことを申されました。

そこでその後を受けて社会の問題というがつまり何が問題なのかと考え始めたわけです。そして、これはいろいろ議論したのですが、結局、家族というキーワードへいつも帰っていつてしまう。そういう、堂々巡りをしているような状況でありまして、これは皆さんにも是非考えていただきたいのでありますけれども、日本が戦後失ったものの中で、一番大きなのは実は家族ではないか。こういうふうには思えば思うほどそう思えてくるわけです。

確かにある思い込みをしますと、なんでもかんでもそう見えてくるということとはよくあるのではあります、どうもいろいろな問題が家族というキーワードへ帰ってくるように見えるのは確かなことでありまして、そういう点からカルトというものを考えてみたい。そこでカルトとは何かと申しますと、実は定義がよくわからない。本を読めば読むほどわからない

ようなところがありまして、まあ、ある特性をもった集団、それだつたら何だつてそうなのですが、まあ、極端に言えばお釈迦さんの作った教団というの、これは当時のインドではたいへんなカルトなんですね。そういうものが発生の原点にあるわけですが、キリスト教といえども同じことですが、ある特性を持った集団をカルトと称すると、そして、それは宗教に限らない。経済的カルトもあれば、政治カルトもあるぞということであるらしいんです。

つまり、定義しようとする、何が明確に決められるかなるべくいろいろな現象をはめ込もうとすると、これという定義はなかなか与えにくいものでありまして、ぼんやりと結局、定義なんかせぬ方がまだだというような定義しかできてきません。しかしそれでは困るので、その特徴、カルトというものがどんな特徴をもっているかをまとめてみますと、排他性、独善性、閉鎖性、秘密主義、まあ、いろいろ挙げられているのでありますけれども、まあ、閉じられた場所、閉鎖性というものに集約されるのではないかと思うわけです。

こういうカルトというものが世界的にもなぜ発生したのか。これはまさに伝統教団の衰退が原因であります。これは社会の繁栄ということ、伝統教団もその中でやっと貧乏から脱して、いくらか世の中の動きにつれ豊かになってきた。そしてそれに反比例するような皮肉な現象であります、お

寺が何とか食えるようになりますと、どうなるかと申しますと、世俗化が始まります。そして、世襲が始まります。そして、世襲もこれは悪いことではなく、むしろ利点も非常に大きいのでありますが、これをきちんとなしと、やはり弊害も大きく目立ってしまふ。そういうところがあります。そして、世の中全体がモノモノと物神信仰で走りますから、眞の仏教信者が減っていく。形式化していく。そして、長期低落傾向の中へ入っていくわけでありまふね。

昔は、新興宗教というのは、俗に「貧・病・争」、つまり貧乏や病氣、あるいは家庭内争議、そういった所詮世俗的・現世的な苦しみからの脱出を目指し、現世利益を願って入ってくる方がいたわけですが、そういうものが社会の表面的な繁栄の中で治まってきたときに新新宗教というようなものが出てきたわけがあります。したがって新々宗教(こういう定義を使わぬ立場もありますが)、これは時代の精神的欠落あるいは紐帯の消失などを補う機能を持つという事が明白であります。これは本来伝統仏教が受け持つべき課題ではなかったのか、にも拘わらず彼らが、彼らだけがなぜ吸引力があるか、という問題が結局一番大きな問題になってきます。

そこには戦後教育の中での家族、あるいは家庭の問題が、どうしても出てこなければならぬ。というのは、家族、あ

るいは家族の秩序、これは、まあ儒教的なものを日本も受け入れたわけでした、これ自体が私はいとは実は思っていないわけで、日本はどうも昔は母系家族だったのでないか。そして、そのほうがうまくいくのではないかと内心では思っておりまふ。男は弱いものですから、みなマスオさんになつてしまつたほうが幸せではないかというふうに思ふのですが、とにかく、マスオさんであれ、関白亭主であれ、家族というところに、日本の文化のひとつの原点がある。それが単に封建的遺制としての家族、あるいはその秩序というものを解体していく方向が加速され、そして、自由な個人、個人の時代というのが始まつたといわれております。

かくて家というものは崩壊しまして、我々は俗に犬の家族といつてゐるわけですが、アメリカがそうであるように、お爺さん、お婆さんを知らない孫がどんどん出てくる時代、核家族ですね。こういうことで、家というものが崩壊します。家が崩壊しますと墓は存在意義を失い、先祖供養も途絶えていくということは一連の連鎖反応であります。そして、一方でフリーハンドの自由を与えられた子供というのは幼稚園の頃から大人と対等の「人権」を保障されているわけです。彼らは人権を持っていますから教師とも親とも対等だということになります。いまの教育では、子供は、対等な人間として親に向かい教師に向かいます。そこでは、もはや上から下に

ものごとを伝える、今すぐに必要性や楽しみが見いだせない知識やもの考え方、畢竟してトレーニングをとこなう教育の対象にはなり得ません。学校が潰れるのは、成り立たなくなるのは当たり前のことでありまして、上下関係と礼節のないところに恐らく教育は成立しないでしょう。権利が保障された自由な場所のできる教育、例えば大学の教育なんかがそれに当たるのでしょうか、そのためにはかなり高等な教育を受けた後に自覚的に選ぶものでありますから、子供に勉強をさせるというのは、ある種、強制力があるわけです。勉強ということがある。遊びとということがある。あなたには人権がありますから、どちらを選びますか好きな方を選びなさいっていったら、遊びの方を選ぶに決まっております。勉強の方を選ぶ子供がいたら、やはり一度調べてもらった方がいいのではないか。そういうのが子供本来の姿であるわけです。

ですから、子供というのは何かとということを忘れて人権を与えてしまふということ、これは裏をかえせば親や教師の側の責任放棄でもあるのですが、それによって社会の仕組みをつぶしてしまっているのではないか。そういう中で何も教えられないことがなく自立性も失なってしまうと子供はさまざま始めるわけですね。そして、そんな社会の中にカルトが吸引力を發揮します。カルトというのは、まず同じような仲間がいる。そして共通の目的がはっきりしている。例えば、

「悟る」、あるいは「社会を変える」、それから、そのための方法もはっきりしております。修行の実践体系ですね。それから、効果がはっきりしている。しかも短時間で手に入れる事ができる。これがまた違うところです。臨済宗も例えば方法はちゃんとついております。一定の効果もあります。しかし、非常に手間がかかる上にわかりにくい。

それで、カルトの特徴は即効性、今日やったら明日には効果が現れるくらいよく効きます。ですから、そういうものに対して我々伝統教団が対抗しようとしなくても、長い歴史が背景にありますので教理を的確に喋るためには、たいへんなややこしいことが起こってしまうわけです。

例えば、禅というのは非常に簡明な実践の教えだと言われておりますが、ひよいと道端で出会った人に禅とは何ですかと聞かれたら、大概、即答できない。ぐっと詰まってしまうわけです。禅とは坐禅だなんていつたつてまるっきり説得力はないわけでありましてさほど単純でもない。いろいろ考えますと、実は禅を求める人というのは、相当知性が高くないと駄目なんです。しかし「お前馬鹿だからもういいよ」というわけにもいきません。我々自身思わぬ所で馬脚をあらわしてしまつたりもする。それで我々は日夜悩むわけでありまして、殊ほど左様に簡単な禅を説明しようとする、たいへんな難解な教理とか歴史をたたらたら言わないと上手くいかない

というようなことで明快な説得力がないわけです。

ですから、これはいろんな宗派で同じなんです。例えば、念仏だけでなぜ救われるのかといわれても詰まってしまうわけですね。ですから、そういうものに対してカルトが明快に答える、というのにはかなわない。一つはそういう点で吸引力がなくなっている。

昔のことを振り返ってみますと、昔、浄土真宗、一向宗ともいいましたが、これも純然たるカルトですね。これが爆発的に広まったのは、「欣求浄土」これ一つであれだけ広まりました。そしていまもあれだけの大きな力を持っているのですが、これはいずこも同じように情性の要素もあるのかも知れない。それはともかく、こういう状況に対して禅が何を提示できるのであるつかというと、ややこしいことになってくるわけです。

そして、伝統教団が依存している家族というものの崩壊、これが問題でそろそろ結論に行かなきゃいけないのですが、家族がなくなつてさまざま個人というのは、実はほとんどの場合、個人として単立できないわけです。

和辻哲郎の『人間の学としての倫理学』に、「人間（じんかん）」「つまり、人間（にんげん）」といつているこの「人間」の概念を持ち出すまでもなく、人というのは自分の周りに仲間なしにはいられない存在です。意外とたった一人で孤独に

耐えるという人は少ない。まずあり得ないといつてもいいかもしれません。ほんとに孤独に耐えているかに見える人も、実はその孤独を見守ってくれている人を必ずシステムとして残しているわけです。あいつらが見てくれていると、ほんとは誰も見ていないかもしれないのですが、それに気づくとたぶんやつていけないでしょう。

だから、孤独というのは非常にわがままなもので、しかも選ばれた者にしか選択できないものです。ところがこれを幼い子供達に既け与えてしまうわけですね、いまの社会は、そうすると彼らは切実に仲間を求めます。ところが家族はそれに対応できない。すでに否定されていますから。だから包むことも仲間にもなりきれない。逆に家族はそこで放任し、あるいはその逆の現象として、実は同じことなんです。親子が非常に密接に癒着してしまふ。あるいは非常に細かいことなまでに干渉する。これは無関心とは裏腹の関係にあります。そういう現象ばかりで、しかも社会の大勢にも左右されて本来の家族らしい対応の仕方ができなくなつてしまふ。そういうところへカルトが入り込んでくる。結局カルトとは擬似ファミリーなんです。

例えば、伝統教団の場合、お寺に行きますと布教師がやつてきて、高邁なお話をしてくださいます。そして、禅を理解するにはこうすればよろしい、皆さんはこのようにお勤めを

なさい。そして、はい、ではさよつならと帰っていきます。そうしますと話を聞いた人は、ああ立派なお話だったと、ああ勉強になったと思いますが、そんなものに帰るまでもちやしない。

カルトはどつしているかと申しますと、一緒にやりまじょうつて言うわけです。生活も一緒にしましょう。そこまで責任持つてつきあつてくれるわけです。そして一緒にたたとえば粗末な小屋に入ります。閉じ込められている、というのは外から見た印象に過ぎない場合が多いようです。その中はアットホームなわけですね。そこで目的を同じとする集団が、励ましあいながら一つのことに向かつている。これは原始仏教の僧侶の集まりと、そして禅宗の僧堂と同じ意味をもっております。家族というものを否定せざるを得なくなった子供達は、そうして、街へ放り出されて仲間を探す。仲間はたいてい暴走族やチンピラギャングになるわけですが、そうならなかった幸せな連中がカルトに入っているわけで、どれを選ぶか最悪の選択しかできない子供達が、いまだたくさんいるんだということを理解しておかなければいけない、というわけですね。

そして、カルトというのは、その教義の中に、これはアメリカで始まったカルトがそうなのですが、必ず他の人を誘い込みましようという教義がサブリミナルのように埋め込んで

あるわけです。ですから、次々ネズミ講のように人を増やしていきます。それが本当の意味の布教になるわけでして、これは大乘仏教もしきりにやったことなんですね。仲間を増やそうと。大乘仏典の経典というのは、いまはたいへん立派なものだといわれておりますが、読んでみますと、あれは三つに分かれるんですが、最後の所に流通分というのがありまして、短い結論ですね。そこには必ず読誦を勧め、写経を勧め、そして共に道を歩むことを人に勧めまじょうと書いてあるわけですね、そういうふうには宗教は必ず宣伝をして広めていくという動機を持っているわけです。

ですから、禅の布教師が命令形でものを言っただけではなく、一緒に歩きまじょうという形の方が、宗教の形体としては正しいということになるわけです。では、そういう風に宗教的な側面から観察しますと、却つて理に適っているカルトに、どう対応していくのか。つまり、カルトというものを反面教師にして、そこにあぶり出しになつてくるところの伝統教団の欠点を正すしかない。

例えば、臨済宗の場合でしたら、これを悟りの宗教であることをきちんと明示すべきである、ということになっていきます。曹洞宗につきましては私は門外漢できちんとしたことは言えないのですが、たぶん悟ったあとの宗教というふうになるのかなと思うのですが、その辺はご専門の方にお任せし

ます。つまり、何を目的とする宗教であるかをきちんと明示した上で、それに携わる僧侶が真つ先にそうである必要があるわけですね。悟りの宗教であるといった場合、おめえ悟ってないじゃないかという問題が必ず出てまいります。

そういう時、便利なのが「菩薩の思想」で、まあ悪徳不動産屋みたいなものなんですが、自分が行かないけど、あそこはいいから行ってらっしゃい。こつこつのが「菩薩の思想」ではないかと疑っています。「われ未だ渡らざるに、他を先に渡す。」なんかかっこいいですけども、よく考えたら胡散臭い話です。浄土って素晴らしいですよって言われても、ではあなたは行ったことあるのかよって、こつこつことなんですが、「菩薩の思想」というのは、自分を信じているわけですよ、不動産屋と違つところは。そこがいいところなんだと私も思うから一緒に行きましょう、というのが菩薩なんです。が、そういうふうには悟りを目指しましょう、というようにことをきちんと表に出す。そのためには日頃の努力が、だいたい人間てのは、特に子供なんてのはよくそれがわかるのですが、親がかつこつけて子供を教育したつて駄目で、背中向けて油断してる時にそれをしつかり見ているわけですから、体面だけ繕つても駄目、本当に自分がそう思つて、そうなるうと努力しないといけないだろうと思ひます。

だから自らを律することに厳しくあらねばならないという

ところがでてくるわけです。それから、個人というものが単独で個人で放り出される状態は、人間として対応する事が不可能なのであるということがはっきりしておりますから、個人のもう一つ大きなユニットである家族、それから、社会に広がっていくという方法もありますが、それとは別に、家族から先祖へ広がっていく、こういう方向が特に宗教には必要でなからうかと。そして、その先祖から延々と繋がっている家というものの中に伝えられてきた日本文化というものの再認識、そして、検証ですね。先祖供養というのは、実は仏教の本来の教理とは何の関係もありませんから、それを仏教の教理の中に、どう位置づけるかということ、きちんとやっておかなければいけない。そうすることによって、家族というもの、つまり、これは先祖を祀る共同体でありますから、それを仏教として、どうとらえこんでしまふかということ、きちんと出さなければいけないのではないかと。

そしてもう一つは、時事問題への敏感な反応ということに尽きるわけですね。

いろいろ雑多なことを言いましたが、結局、結論は簡単なことで伝統を守りながら釈尊以来の、あるいは臨済や道元禅師以来の教えの伝統、歴史的経過の中の変容も含めて現在に至るまで形に残されたもの、その形にこめられた心というものをきちんと検証しつつ伝えるべきは伝える。そして、変え

るべきは変える。これはそのいずれを選ぶかということとは、真剣に考えて選択されなければいけません。そして、その一方で時代に即応する動きですね。これを我々の方では「観世の眼」といっておりますが、世の中を見る。我々と一応は同じ立場である菩薩の一人である観音様も世の中の様々な声をきちんと聞き取りになっていたじゃないかと。それを見て、それに対してどう対応するのかということが我々に課せられた課題ということになります。

しかも宗義に則って対応していかなければいけない。その時、釈尊の立場で戦争は駄目、しかし、傍観はします、自分の先祖が滅ぼされるのも手出しはしませんという立場を貫くのか。それとも、それは許さんと。仲間が、親が、子が殺され伝統文化が破壊されるのは座して見るわけにはいかない。刀を持って戦わなければいけないという選択をするのか。それは、これからきちんと考えなければいけない問題ではないかと思っわけです。

話があつちいたり、こつちいたりしました。高尚な場所でも低俗な雑談に終始した事を恥じます。たいへん申し訳ありません。まとまっておりますが、これで失礼いたします。

（質問）